

山頭火ふるさと館報

第12号
令和6年3月

いふあこやん

一般社団法人防府観光コンベンション協会
山頭火ふるさと館
館長 中村 浩典

山頭火は、窓越しに見える麗らかな春の景色を身体いっぱいを感じながら、「窓あけて窓いっぱい春」と詠んでいます。今まさに、色とりどりの花が咲き揃う好季節を迎え、皆様にはますますご清祥のことと拝察いたします。

新型コロナウイルス感染症の影響で、令和二年度には来館者がそれまでの約三割にまで激減していましたが、年次的に回復してきており、今では人流も活発になってまいりました。とりわけ、昨年五月八日の五類感染症への移行後は、市内はもとより県内外からも多くの方々に「来館」いただいております。職員一同この上ない喜びを感じております。お陰をもちまして、今年度は開館以降、年間最多来館者数を計上することができました。これも平素から当館の運営に對しまして、並々ならぬお力添えを賜っております。皆様のお陰であり、衷心よりお礼を申

申し上げます。

さて、今年の秋からJR西日本の豪華寝台列車「トワイライトエクスプレス 瑞風」の新たな立ち寄り観光地として防府市が選ばれ、現在、国内で注目を浴びています。これまでの交流人口増加に向けた多様な取組が評価され、これが実を結んだものと思います。さらには、隣市の山口市も今年一月九日にアメリカのニューヨーク・タイムズ紙が選ぶ「今年行くべき五十二カ所」の第三位に選ばれました。隣接する防府市にとっても喜ばしい話であり、防府市への観光客も増加することが期待できます。山口県は、防府市も含めて県内各市町それぞれの良さが調和して一つの県としての魅力を醸し出しており、その中の重要なセクションを担っているのが、歴史と文化の薫りあふれるまち「防府市」であると考えます。その防府市唯一の文学館であり、文化観光の交流拠点の一つにもなっているのが『山頭火ふるさと館』です。前述のように、今年、防府市は各方面から注目を浴び、多くの人々の来訪が想定されます。この良き機会を捉え、当館では特色ある企画展や関連イベント、教育普及活動等を展開し、防府市出身の漂泊の俳人「種田山頭火」及びその句、さらには自由律俳句の良さや魅力を積極的に発信することとしております。訪れる人が心豊かになれる施設をめざしてまいりますので、多くの方の来館をお待

目次

館長挨拶	1
トークイベント 山頭火と地橙孫	2
企画展 山頭火に出会った人々第2弾	4
兼崎地橙孫と木村緑平	
寄稿 緑平さんと二人の妻	
ツネさんとフイさん	5
企画展 雑誌『俳句研究』と自由律	6
常設展示 山頭火の読書生活	7
追悼 伊集院静	7
令和五年度書道コンクール	8
第五回フットコンテスト	9
第六回自由律俳句大会	10
図書・資料受け入れ報告	10
今月の一句アーカイブ	11
今後の企画展情報	11
イベント情報	12

ちしております。

話は変わりますが、現企画展「雑誌『俳句研究』と自由律」(四月七日まで)を終えまして、四月十二日からは新企画展「新收藏品展」を開催します。近年、当館において新たに収蔵した資料の中から、山頭火の句を書や絵画で表現した作品、山頭火と関わりあつた俳人の句、さらには防府ゆかりの俳人の句などをお披露目することとしております。各種收藏品を通じた山頭火並びに俳句の世界をご堪能いただければ幸いに存じます。

結びに、今後とも山頭火ふるさと館への変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

トークイベント
山頭火と地橙孫

日時 令和五年九月十六日(土)
場所 山頭火ふるさと館

登壇者

兼崎人士(兼崎地橙孫顕彰会会長)



高岡勲(郷土史研究家)



企画展関連イベントとして開催したトークイベントの一部をここに紹介します。

山頭火と地橙孫の出会いについて

(兼崎) 熊本で大正五年の四月に初めて二人は出会うわけですけど、それまでに、大正三年、熊本で出会う二年前から文通をしております。熊本郡三丘(現・周南市)の俳人、河

村蟻介が、大正三年に俳誌『樹』を創刊しました。なお、三丘(みつお)は温泉で有名です。俳誌『樹』の読み方は、「いつき」と思いますが。地橙孫は二十四歳で熊本の五高(第五高等学校)の学生だったんですけど、これに投稿するわけですね。で山頭火も投稿していただいたので、おそらくお互いの俳句を雑誌を通じて読み合っていて、それで文通をするようになったということです。普通の文通程度で、熊本まで地橙孫を頼っていくというのはちよつと考えられない感じですけど、よつぽど文通で人生観とかいろんなものを話し合っていたから、それで山頭火もひよつとしたら自分たちの家族も含めて面倒をみてもらえるんじゃないかな、ということまで地橙孫を頼って熊本にいくわけです。今の時代では考えにくいかもしれませんが、当時は人と人とのつながりはあったんだろうなと思います。ましてやね、地橙孫は学生で親からの仕送りを受けて勉強している身ですけど、山頭火一家のために一生懸命頑張ったということですかね。

下関での地橙孫について

(高岡) 山頭火は地橙孫に助けていただいた、救っていただいた。下関に山頭火が来て、今日飯代ありますか、電車代ありますか、つて地橙孫が聞いたら素直にありませんと言います。家に帰っても、山頭火が既にして酒を飲んでいるんですね。最初なんかびつくりしたらしいですけど、地橙孫は山頭火の気持ちも分かっていますので……。

下関で私が山頭火の話をすると地橙孫はどうなのかと言われる。それくらい下関では地

橙孫ファンが多いです。だから色々なものが残っています。長府観光協会の前にはひとつ地橙孫の句碑があります。下関の人は地橙孫を愛していますので、今から山頭火がブームになつて出てきたら地橙孫も評価されると思います。(ほかの土地では)下関の地橙孫という認識が少ないかと思えます。申し訳ないんで、今から頑張りたいと思います。



▲兼崎地橙孫句碑(下関市長府)
「虹の弧に故郷の山河収めたり」

(兼崎) 地橙孫は下関で二十三年間暮らしているんで、下関を代表する文化人の一人であるというふうに言われております。先程言われましたように下関の長府観光会館のところに句碑があります。これは、下関の市役所勤務で図書館の館長さんとかいろいろ勤められた清永唯夫先生が、やっぱり地橙孫は下関を代表する文化人ということで、真つ先に句碑を作られたようなんです。平成五年(一九九三年)、三十年前に下関市が作ったもので、文学碑の建立文化事業ということで、一番目の石碑が地橙孫。二番目に山頭火の詩碑、句碑

じやなく。長府の川沿いだったと思いますけど、二番目に作られたのが山頭火の詩碑です。

地橙孫の句集を下関の教育委員会とか関係者の方にお配りしたら大変喜ばれまして、やはり下関を代表する文化人の一人であるという言葉が何人かの方からあったのが、ある意味嬉しいし有難いなと思つた次第です。

地橙孫は山頭火をどのように思っていたのか

(兼崎) 地橙孫は山頭火に手紙を出します。その手紙の中で、「山頭火さん、もっと真面目に俳句を作つたらどうですか。」ということを言つたらいいんです。そうすると返事が帰つてきて「いや僕はこれでいいんだ。自分は自分の今までのこの俳句でいいんだ。」というふうに言つて、その後地橙孫は「まあなんとつまらない、愚かな質問をしたもんだ。」と反省したということが残っています。地橙孫からすれば山頭火の俳句を読んで、もうちよつと真面目に作つたらどうか、ある意味正直にそう思つたんでしょうけど。

それからもう一つ、地橙孫は山頭火の俳句を高く評価していたということが言えると思ふんですよ。いわゆる一目置いてるというか。

地橙孫は俳句仲間、友枝寥平（ともえだりようへい）とかそういう人との手紙の中で、自分たちの俳句をいいというか、評価してくれる人はほとんどいないと書いています。ところがですね、この当時から山頭火の俳句は、やっぱりいいというふうには俳句仲間からは高く評価されていたんですね。半分以上やましいと言うか、自分は一生懸命作つてのに自分達の俳句を褒めてくれたり、評価してくれたたり

する人はほとんどいない。ところが山頭火の俳句は、当時から色んな人から高い評価を受けていたようで、このことを地橙孫は、正直に残しておられます。ですから、どう思っていたかと言うと、ある意味相反する二つの想いがあつたのかなと推察されます。

山頭火と地橙孫の違いや共通点

(高岡) 下関における地橙孫は、俳句の指導をできる立場にいました。弟子もおりました。山頭火はそこへ行って泊まつて、飲んで……という人生はちよつと、地橙孫の慈悲深いところが分からなくもないけど、ちよつとみんな山頭火にやられます。今こそ「山頭火」と言いますが、酒を飲んで道に寝たようなこともあり、単なる乞食坊主だと思われたところがあるんです。そして山頭火みたくになつちやいないよと。山頭火は今では評価されていますけど、そういうような声が聞こえませんでした。その点地橙孫は紳士ですから、恵みを与える方だったんですね。山頭火は恵みを受ける方だった、その違いがあるかと思ひます。

(兼崎) 俳句に関して言えば、単なる教養とか趣味とか娯楽じゃなくて、二人にとつての俳句は生きがい、それにつぎるんじゃないか。地橙孫は、やっぱり正岡子規と同じで俳句を、単なる娯楽とか趣味の範囲ではなく文学というレベルまで高めようと一生懸命努力したらいいですね。俳句に関する俳論とか研究論文をたくさん投稿しています。『海紅』という俳句雑誌にも地橙孫は、「季題論」という研究論文を出して、すばらしく高く評価されたんですね。

(高岡) これ（「季題論」）はすばらしい。これ

が脚光を浴びて、俳句界で旋風を巻き起こしたんですね。

(兼崎) おそらく山頭火も地橙孫も、自分の人生で俳句に巡り合えたことを感謝していたと思います。特に地橙孫の場合は豊浦中学五年生の時に病気になるって、約二年経って治るんですけど、あとで振り返ってみると俳句に出会えたから早く病気が治つたという言い方で、毎日俳句を作ることによって、精神的なモチベーションとか意欲がわいてきたんですね。大人になつてもどちらかというと病弱な地橙孫は病気になることがあつたんですけど、その度に俳句によつて救われたと言つています。山頭火もおそらく同じで、俳句が生きがいたという思いが二人の間には、共通認識としてあつたんじゃないかと思ひます。



企画展 山頭火に出会った人々

兼崎地橙孫と木村緑平 第2弾

後期展示

会期 令和五年十月六日(金)

～令和六年一月八日(月)



漂泊の俳人と言われる種田山頭火には、多くの友人がいました。今回の企画展ではその中でも、山頭火が自由律で頭角を現し始めたころに出会った人物二人を紹介しました。

後期には生涯精神的・経済的に山頭火を支え続け、山頭火が最も頼りにしていた木村緑平を取り上げ、山頭火と彼らの深い友情をご覧いただきました。

なお、企画展の開催にあたり、以下の方々にご協力いただきました。謹んで謝意を表します。(敬称略)

木村好輝

木村緑平顕彰会

木村緑平

明治二十一年(一八八八)年～昭和四十三(一九六八)年。医師・俳人。

現柳川市生まれ。中学伝習館在学中から俳句を始め、長崎医学専門学校在学中に自由律俳誌『層雲』に投稿するようになる。卒業後は三井三池鉱業所病院(大牟田)に勤め、その時期熊本にいた山頭火と初めて出会い、以後生涯山頭火を支え続けた。大正十五(一九二六)年に故郷に開業するが一年でそこを去り、明治鉱業株式会社豊国炭鉱中央病院(糸田町)に就職。晩年は故郷柳川に帰る。生涯で多くの雀の句を詠んだ。

山頭火との交友

緑平は、どのようなときも山頭火に手を差し伸べてくれました。

二人は大正初期に自由律俳誌『層雲』を通じて出会っています。大正五(一九一六)年に熊本に移り住んだ山頭火は、『層雲』(大正五年九月号)に「層雲誌上で親しみのある方には(略)大牟田には木村兎糞子氏がられるさうであります。まだお目にかかりません」と書いていますが、この木村兎糞子は緑平のことです。実際に二人が会うのは大正八年頃のこととで、それ以降は山頭火が亡くなるまで頻繁に手紙のやり取りをしています。その中には無心の手紙も多くありましたが、緑平は惜しみなく山頭火に援助の手を差し伸べ続けます。

緑平のその行動はすべて、山頭火のすばらしい句をこの先も読み続けたいという思いからのものでした。

一方山頭火も、「緑平さんは心友だ、私を心

から愛してくれる人だ」と日記に書くように、緑平を心から信頼し、その温かさに常に感謝しています。

【展示資料一覧】

『層雲』第四巻第四号(層雲社・大正三年七月・当館蔵)／【写真】柳川にて開業の病院(木村緑平顕彰会蔵)／【葉書複製】昭和十五年七月三日付け種田山頭火より木村緑平宛て(原本・木村家蔵)／【葉書】昭和五年三月一日付け種田山頭火より木村緑平宛て(昭和五年三月一日・当館蔵)／【掛軸】枝をさしのべて葉ざくら(種田山頭火・当館蔵)／【パネル】木村緑平句碑除幕の様子(木村緑平顕彰会蔵)／句集『鴉・雀』(種田山頭火、木村緑平・昭和十五年・当館蔵)／句集『すずめ』(木村緑平・昭和二十五年十月・真岡礦業所ボタ山句会発行・当館蔵)／『雀の生涯』(木村緑平・大山澄太編・昭和四十三年六月・当館蔵)／【掛軸】雀に生れてきたのではなし(木村緑平・当館蔵)／【掛軸】木の根かげ無くてあたゝか(木村緑平・木村家蔵)／【短冊】雀には巢を造らせて置いて一日物かく(木村緑平・木村緑平顕彰会蔵)／【短冊】子にやるものが見つからないでゐる雨の夕べの雀(木村緑平・木村緑平顕彰会蔵)／【短冊】今日の日落ち草原の雀おの／喜び立つ(木村緑平・木村緑平顕彰会蔵)



▲展示風景

寄稿

緑平さんと二人の妻
ツネさんとフイさん

木村緑平顕彰会
荻島架人

緑平さんは長崎医学専門学校在学中結婚している。明治四十五年、緑平さん二十三歳、ツネさん二十歳のとき、それは緑平に万一のことがあつてはとの配慮から、両親が早く結婚させたからである。在学中の見合い結婚だから、単なる式を挙げただけであとは別居。單身長崎に滞在、卒業後大正三年大牟田市旭町から新婚生活が始まる。

山頭火は昭和七年五月一日の日記にツネさんのことをこう記している。
筍を、肉を、すべてのものをやはらかに料理して下さる奥さんの心づくしが身にしみた(私の歯痛を思ひやつて下さつて)。
緑平老は、あやにく宿直が断りきれないので、晚餐後、私もいつしよに病院へ行く、ネロ(その名にふさはしくない飼犬)もついてくる。

緑平居に多いのは、そら豆、蒨、金盞花である、主人公も奥さんも物事に拘泥しない性質だから、庭やら畑やら草も野菜も共存共栄だ、それが私にはほんたうにうれしい。

山頭火は酒呑みの乞食坊主。普通の奥さん

だったら、嫌うものだが、ツネ夫人はいつも温かく迎えている。

(緑平さんがツネさんを)看護する日記にこんな句がある。

黄粉餅してそして私にも
雪空病人おいて鯛買ひにゆく

昭和二十五年三月十七日帰らぬ人となったその後こんな句がある。

妻の足袋はいて

今朝も一人トーフ買ひにゆく

妻のねていたところねて月が見える松の木

昭和二十五年、緑平さん六十二歳、再婚相手フイさん五十一歳の見合いの日にこんな句がある。

こんな廻り合わせの

二度目の妻となる女と火鉢に手をおく

数年後、フイさんを看護する中こんな句がある。

匙で春の白い雲食べさせている

病人に笑って見せてそつと鼻かむ

いちいちに病人と話した紙

かさねておいとく

ゆまりさせる夢からさめゆまりをさせる

緑平さんも風邪で寝込み、昭和四十三年一月十四日フイ夫人の方に手を差し伸べて瞑目したという。



▶ツネさんとの別府への温泉旅行

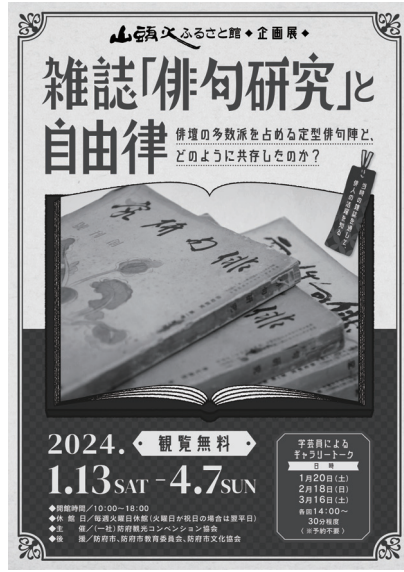


▶フイさんを看護する緑平さん(撮影:城台庵)

企画展 雑誌『俳句研究』と 自由律

会期 令和六年一月十三日(土)

～四月七日(日)



戦前に刊行されていた総合俳句雑誌『俳句研究』は、俳壇の主流であったホトトギス派をはじめとする定型俳句の俳人たちが主に活躍していました。今回の展示では、『俳句研究』の中で山頭火だけでなく河東碧梧桐、荻原井泉水、中塚一碧楼等、自由律に関わる俳人が定型俳人たちと並んで名を連ねていた様子を紹介し、当時の俳壇における自由律俳人の活躍をご覧いただきました。

一、雑誌『俳句研究』について

総合俳句雑誌『俳句研究』は、昭和九(一九三四)年に改造社から発刊されました。当時の俳壇を高浜虚子と虚子が主宰する『ホトトギス』が席卷していた中での創刊でした。

『俳句研究』では当時の大家だけでなく多くの新人の作品を掲載しました。また、俳句に関する論争も誌面上で活発に行われました。自由律俳句の面々も、『層雲』と『海紅』を中心に名を連ねています。しかし太平洋戦争が始まる頃には誌面にも様々な制約が加わり、ついに昭和十九年六月に廃刊となりました。戦後に復刊した『俳句研究』編集部は、戦前の『俳句研究』について「当時の俳壇の開明と発展に大いに寄与した」と述べています*。

*俳句研究編集部「俳句研究の歩み」(『俳句研究』第五十巻第六号／一九八三年・角川マガジンズ)

二、『俳句研究』と山頭火

『俳句研究』には山頭火も自由律俳句を投稿していました。令和二年～四年に出版された『新編山頭火全集』(春陽堂書店)にも、『俳句研究』所収の山頭火句が新たに掲載されました。孤高の俳人というイメージも強い山頭火ですが、『俳句研究』によってわずかながら中央俳壇とも繋がりをもったと言えます。

山頭火の作品は十一回掲載され、うち三回は巻頭に名を連ねました。巻頭に作品が掲載された自由律俳人は、中塚一碧楼、荻原井泉水や山頭火を含め七人しかいません。

その他、折々に消息も掲載され、亡くなった翌々月号に「種田山頭火氏逝去さる。」と訃報も載りました。

三、『俳句研究』と自由律の俳人たち

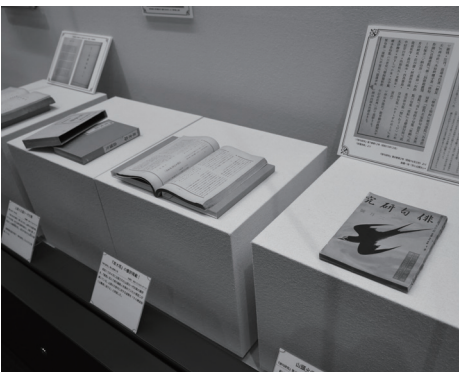
自由律俳壇は当時、荻原井泉水の『層雲』と中塚一碧楼の『海紅』が二大勢力でした。しかし当時の俳壇全体の中で見ると自由律は少数

派であり傍流でした。

それでも、非定型すなわち自由律俳句は明治末期から約二十年に渡って細々と続いてきました。この自由律俳句の流れを支え、『俳句研究』で活躍した主な俳人として、荻原井泉水、中塚一碧楼の二人を、そして河東碧梧桐の存在を挙げる事ができます。

【展示資料一覧】

『俳句研究』第一巻第一号(改造社・昭和九年三月)／『俳句研究』第二巻第十二号(改造社・昭和十年二月)／『俳句研究』第三巻第一号(改造社・昭和十一年一月)／『俳句研究』第五巻第四号(改造社・昭和十三年四月)／【短冊軸装】山すそあたゝかなこゝにうづめま(種田山頭火)／『俳句研究』第五巻第一号(改造社・昭和十三年一月)／『草木塔』(種田山頭火・八雲書林・昭和十五年四月)／『俳句研究』第七巻第七号(改造社・昭和十五年七月)／『俳句研究』第八巻第二号(改造社・昭和十六年二月)／『俳句研究』第一巻第七号(改造社・昭和九年九月)／『俳句研究』第四巻第三号(改造社・昭和十二年三月)／【画賛幅】一雨しづくする尚香もあり薊もあり(荻原井泉水)／『俳句研究』第一巻第五号(改造社・昭和九年七月)／『俳句研究』第一巻別巻 自由律俳句集(山本三生・改造社・昭和十五年四月)



▲展示風景

常設展示 山頭火の読書生活

会期 令和五年四月十四日(金)

～令和六年四月七日(日)

読書浄土

旅極楽

飯醍醐

酒甘露

これは、昭和十二年の日記に山頭火が記した言葉です。旅は極楽のようだ、飯は醍醐(仏教の五味のうち最上の味のもの)のようだ、酒は甘露のようだ、好きなものを仏教用語でたとえながら列挙する中で、読書は浄土のようだと語っています。

ここからも分かるように山頭火は大変読書好きで、日々さまざまなジャンルの本を読んでいます。自由律の友人たちが出版した本、日本の古典文学、海外文学、さらに芥川賞受賞作等の最新作を読むこともありました。

このたびの展示では、日記に記録のある中から一部を選び、山頭火が読んでいた版に近いものを四期に分けて展示しました。当時の書物の雰囲気とともに、山頭火の幅広い読書生活をご覧いただきました。

【展示資料一覧】

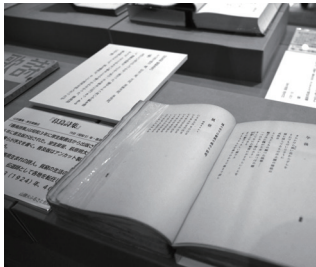
〔内〕は山頭火の読書記録
○荻原井泉水『続旅人芭蕉』(春秋社・大正十五年・当館蔵)〔昭和五年〕旅人芭蕉』／『名家俳句集』(有朋堂書店・昭和五年・当館蔵)〔昭和七年〕芭蕉翁俳句

集)／荻原井泉水『京洛小品』(創元社・昭和四年・当館蔵)〔昭和七年〕／河本緑石『大空放哉伝』(香風閣・昭和十年・当館蔵)〔昭和十年〕／『世界文学全集』(露西亜三人集)〔新潮社・昭和三年・当館蔵)〔昭和十一年〕

○荻原井泉水編『放哉書簡集』(春秋社・昭和二年・当館蔵)〔昭和七年〕／大山澄太『日本の味』(大耕舎・昭和四十二年第七版・当館蔵)〔昭和十五年〕／佐藤吾一『豆腐を語る』(通友会・昭和八年・当館蔵)〔昭和九年〕／野村朱麟洞『野村朱麟洞遺稿句集 礼讃』(層雲社・平成元年複製版・当館蔵)〔昭和十三年〕／前田晃訳『モウパッサン短篇集 頸飾他七篇』(岩波書店・昭和十一年再版・当館蔵)〔昭和十二年〕

○斎藤清衛『欧羅巴紀行 東洋人の旅』(春陽堂書店・昭和十二年・当館蔵)〔昭和十二年〕／荻原井泉水『改訂芭蕉選集』(春秋社・昭和八年・当館蔵)〔昭和九年〕／『漂泊俳人井月全集』(伊那毎日新聞社・平成元年(増補改訂版三版)・当館蔵)〔昭和十三年〕／山村暮鳥『暮鳥詩集』(厚生閣書店・昭和五年普及版・当館蔵)〔昭和五年〕／『詩歌』第十六卷第一号(白日社・昭和十年一月・当館蔵)〔昭和十年(詩歌八月号)〕

○『中央公論』第五十年第十号(中央公論社・昭和十年十月・当館蔵)〔昭和十四年「夜明け前」〕／岡倉寛三・村岡博訳『茶の本』(岩波書店・昭和十五年第十六刷・当館蔵)〔昭和十年〕／『鉄道省』日本案内記 中国・四国篇』(博文館・昭和十五年第九版・防府市立防府図書館蔵)〔昭和十三年〕／若山牧水『牧水紀行文集』(改造社・昭和八年・当館蔵)〔昭和八年〕／火野葦平『麦と兵隊』(改造社・昭和十四年第十二刷・防府市立防府図書館蔵)〔昭和十三年〕



▲▼展示風景



追悼 伊集院静

会期 令和五年十一月二十五日(土)

～令和六年一月八日(月)

令和五年十一月二十四日、防府市出身の直木賞受賞作家、伊集院静氏がご逝去されました。

山頭火ふるさと館の開館にあたっては、「防府市ゆかりの文藝家たち」コーナーでのパネル展示にご協力いただきました。

謹んでお悔やみ申し上げますとともに、哀悼の意を表します。

このたびは文芸界に残した多大な功績をたたえ、当館所蔵の資料を公開。直木賞受賞作『受け月』等の著書のほか、直筆の色紙、山頭火と「放浪」について書いたエッセイ等も紹介し、多くの方に伊集院静さんを偲んでいただけたものと思います。

【展示資料一覧】

『受け月』文藝春秋・平成四年／『大人の流儀』講談社・平成二十五年／『ノボさん』小説 正岡子規と夏目漱石』講談社・平成二十五年／『機関車先生』講談社・平成二十六年／『いろいろあった人へ』大人の流儀 Best Selection』講談社・平成三十年
『受け月』文藝春秋・平成四年／『海峡(海峡 幼篇)』新潮社・平成十四年／『春雷(海峡 少年篇)』新潮社・平成十四年／『岬へ(海峡 青春篇)』新潮社・平成十四年／『機関車先生』集英社・平成十五年／『新潮日本文学アルバム』 種田山頭火』村上護著・新潮社・平成五年／『色紙』放浪は孤なり。』伊集院静

令和五年度山頭火ふるさと館
書道コンクール

応募期間

令和五年八月一日(火)～九月八日(金)

表彰式

令和五年十月七日(土)

審査員

小・中学校教育研究会国語研修部、高等学校書道担当教員の先生方四名

市内の小学生から高校生を対象に、山頭火にちなんだ言葉を課題として書道作品を募集しました。部門を五つに分け、小学校一・二年生「くも」、三・四年生「こほろぎ」、五・六年生「波音」、中学生「山頭火」、高校生「もりもりもりあがる雲へ歩む」を書道で表現してもらいました。応募数九〇一点の中から各部門、防府市長賞(最優秀賞)一名、防府市教育委員会教育長賞(優秀賞)一名、山頭火ふるさと館長賞(優秀賞)一名、佳作二名の計二十五名が選ばれました。また、山頭火ふるさとまつり期間内の令和五年十月七日に表彰式を行い、受賞作品を十月八日から十二月二日まで展示しました。

小学校一・二年生の部

【防府市長賞】

平木 陽菜 牟礼小学校 二年

【防府市教育委員会教育長賞】

有富 明莉 大道小学校 一年

【山頭火ふるさと館長賞】

山本 咲月 松崎小学校 二年

【佳作】

脇 花 松崎小学校 二年
古川 昊和 松崎小学校 一年

小学校三・四年生の部

【防府市長賞】

岩崎 杏菜 小野小学校 四年

【防府市教育委員会教育長賞】

宝本 和慶 玉祖小学校 三年

【山頭火ふるさと館長賞】

福田 大騎 右田小学校 三年

【佳作】

宗像 桃可 佐波小学校 三年
松浦 陽汰 松崎小学校 四年

小学校五・六年生の部

【防府市長賞】

藤井 志帆 牟礼小学校 六年

【防府市教育委員会教育長賞】

有富 将志 大道小学校 五年

【山頭火ふるさと館長賞】

新田 菜々美 松崎小学校 五年

【佳作】

永松 芽依 牟礼南小学校 六年
弘中 美咲 牟礼小学校 六年

中学生の部

【防府市長賞】

浅川 由佳 右田中学校 三年

【防府市教育委員会教育長賞】

出穂 日南乃 右田中学校 二年

【山頭火ふるさと館長賞】

岸野 心海 華陽中学校 三年

【佳作】

佐伯 日暖 佐波中学校 二年
岡 伊織 佐波中学校 二年

高校生の部

【防府市長賞】

松田 桃果 誠英高等学校 三年

【防府市教育委員会教育長賞】

町田 有里恵 防府高等学校 二年

【山頭火ふるさと館長賞】

原田 強生 防府総合支援学校高等部 二年

【佳作】

岩谷 夏希 防府総合支援学校高等部 二年

升谷 里菜

防府総合支援学校高等部 二年



▲受賞作品展示風景

第五回山頭火ふるさと館
フォトコンテスト

募集期間

令和五年四月一日(土)～十月三十日(月)

審査員(敬称略)

坂井謙・入江孝治・櫻井宏明・中村浩典

表彰式

令和五年十二月二日(土)

展示

令和五年十二月三日(日)

～令和六年二月十一日(日)

昨年度に引き続き、山頭火の句をテーマにした写真作品を募集しました。県内外からプリント部門四十一点、メール部門二十点の応募があり、その中からプリント部門十点、メール部門七点を受賞及び入選しました。また、審査後の十二月二日に表彰式を開催し、翌日から受賞作品の展示を行いました。現在受賞作品は当館ホームページの企画展・イベント欄に掲載しています。

受賞結果は次のとおりです。

プリント部門

【最優秀賞】

藤田 毅(山口県)

「山家の客となり落葉ちりこむ」

【優秀賞】

内山 えいじ(山口県)

「まつすぐな道でさみしい」

【佳作】

大脇 雅志(岡山県)

「いちりん咲いてゐてふてふてふ」

谷野 和恵(山口県)

「あの雲がおとした雨にぬれてゐる」

広田 和夫(山口県)

「雪へ雪ふるしづけさををる」

【入選】

清水 慶介(山口県)

「路のとうことしもここに路のとう」

富田 虎次郎(山口県)

「秋の水をさかのぼりきて五重の塔」

富田 弘子(山口県)

「日ざかりのお地藏さまのかおがにこに」

久光 美保子(山口県)

「何が何やらみんな咲いてゐる」

望月 正晴(静岡県)

「歩きつづける彼岸花咲きつづける」

メール部門

【最優秀賞】

石川 裕樹(山口県)

「どかりと山の月おちた」

【優秀賞】

三戸 律子(山口県)

「すすきのひかりさえぎるものなし」

【佳作】

近藤 博明(広島県)

「雀こゝまで子連れてきてだんだんばたけ」

堀 将大(岡山県)

「猫もいつしよに欠伸するのか」

【入選】

坂本 加代(山口県)

「水音といつしよに里へ下りて来た」

岡川 清吾(山口県)

「日ざかり赤い花のいよいよ赤く」

灘部 つぐみ(山口県)

「咲いて一りんほんに一りん」



▲受賞作品展の様子



▲表彰式

第六回山頭火ふるさと館
自由律俳句大会

募集期間

令和五年五月一日(月)

～十一月三十日(木)

審査員

富永鳩山(群妙主宰)

久光良一(俳人)

門田美和子(自由律俳句講師)

中村浩典(当館館長)

表彰式

令和六年二月十一日(日)

今回は全国から一般の部一九七七点、子ども部一一四五点の応募があり、十四点が受賞、一〇五点が入選となりました。受賞作品は以下のとおりです。なお、入選作品は当館ウェブサイトに掲載しています。

一般の部

【最優秀賞】

「冷えますすね」の一言であたたまり

神奈川県 ひぐち紀

【防府市長賞】

まるい背でまた来ておくれと見送られ

和歌山県 藤堂まり子

【防府市文化協会会長賞】

ほつと安堵の肉じゃがほふほふ

愛知県 飯島隆

【佳作】

あの夢どこに置いてきたんだっけ

埼玉県 新井秀弥

布団に棲む優しい孤独

鳥取県 岩田侃大

「あの頃」の駅に降り立ち自分を捜す

愛媛県 菅宏史

踏ん張って大地ごと引っこ抜く秋

三重県 小林寛久

陽だまりで妻の平和な手編みのひととき

山口県 和寄はると

子どもの部

【最優秀賞】

ママのりんごがむけるまでせのびしてまつ

福島県 6才 浅野真緒

【防府市教育委員会教育長賞】

母からうけつぐ思いやりのバトンリレー

山口県 小4 藤井咲玲那

【防府市文化協会会長賞】

つられてしまう日溜りのような笑話

福岡県 中3 篠原里緒

【佳作】

軽快に歩く正解のない生き方

山口県 中3 杉村康雄

のんびりあるく陽の当たる路をさがして

山口県 中3 森田有里奈

ゴールがみえる汗水たらした三年間

福岡県 中3 山口加恵

図書・資料受け入れ報告

令和五年九月から令和六年二月までに寄贈いただいた資料をご紹介します。

【寄贈】

○牛久竹男様より「原農平宛て葉書」(種田山頭火)他十点

○大村稔様より『山頭火句碑拓本紀行』(都谷森孝子)

○兼崎人士様より『花芙蓉 ―地橙孫百句抄―』(兼崎地橙孫)

○田村悌夫様より掛軸「住みなれて茶の花の咲きつづく 山頭火」(近木圭之介)他四点

○西野善男様より墨書「両子山をうらから六月の蟬なく」(三宅酒壺洞)、墨書「無二」(荻原井泉水)他十一點

○前田朋子様より色紙「至心信楽」(大山澄太)他十二點

【御著編書】

○「青穂」事務室様『青穂』五十号、五十一号

○富永鳩山氏『自由律俳句クラブ群妙』第三十五号

○藤津滋生氏『井泉水・放哉・山頭火・顕信による自由律俳句キーワード100』

○永富衛氏『旅する詩人◆永富衛エッセイ集◆』

今月の一句アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

令和五年

十月 大地したしう夜をあかしたり波の音

昭和五年十月

旅中、宮崎と鹿児島県の境の福島(現串間市)で詠んだ句。山頭火の自由律俳句の中でも珍しく、文語を用いて「夜をあかしたり」と句の途中で切っており、定型俳句のようなりズムをもっています。「大地したしう」や「波の音」とあるように、雄大な自然を五感によつて捉え、野宿をしたことを表現しています。

十一月 岩ばしる水がたたへて青さ禊する

昭和十四年十一月

高知県の仁淀川沿いを行乞した日に詠んだ句。仁淀川は美しく透き通った水が流れており、山頭火はこの日川で身心を清めたと述べています。この句に漂う神秘的で静謐な雰囲気を作っているのは、古代から和歌に詠まれてきた「岩ばしる」という雅な歌語。また本来は穢れを落とすための神聖な行為を言う「禊」という語も静謐な印象をもたらしています。

十二月 からだあたゝまる心のしづむ

昭和五年十二月

福岡市内から二日市町(現筑紫野市)まで

歩き、武蔵温泉(現二日市温泉)にて詠んだ句。「心が沈む」と言うときの「沈む」は、辞書では「気持がはれず、おちこむ」とありますが、掲句の「しづむ」は、心が落ち着くという「鎮まる」の意味合いを含んでいるのでしょ。心がゆっくりとお湯に沈むように落ち着いていく、温泉での一句です。

令和六年

一月 其中雪ふる一人として火を焚く

昭和八年一月

「其中」とは「其中庵」の「其中」ですが、そもそも其中庵という名前は、法華経のうちの普門品(別名観音経)の中に出てくる「其中一人作是唱言(ごちゅういちにんさぜしようごん)」から取っています。掲句からは、雪の寒い日に庵の中で火を焚いて温まっている、独りでも満ち足りた穏やかな心が表現されています。

二月 汽車も春風のふるさとのなか

昭和八年二月

汽車の窓から入る春風を感じながら車窓を眺めている、あるいは春風が吹く中を汽車が走っていく映像が鮮明に思い浮かぶことでしょう。全国各地を歩いて旅した山頭火は汽車に乗ることも多く、この日は旧友を訪ねて汽車で防府へ向かっています。暖かな春風とともにふるさとへ向かう、和やかな心情が伺えます。

三月 躰音ちかづきハタと消えたり風立ちぬ

(あしおと)

大正五年三月号『層雲』

「ハタ」というのは擬態語で急に足音が止んだことを表わしており、直後で「消えたり」と句

切ることによって更に強調されています。下五では「風立ちぬ」と言い切り、急に吹いてきた風の音や勢いが想像されます。聴覚や触覚に訴えるような表現によつて、足音や、その足音が聞こえなくなる瞬間、吹き出した風の音が臨場感をもつて感じられます。

今後の企画展情報

企画展「新収蔵品展」

会期 令和六年四月十二日(金)

～七月二十一日(日)

近年新たに収蔵した資料をお披露目します。市内ゆかりの俳人の句、山頭火の句を書き絵画で表現した作品、山頭火と関りのあった俳人の句を展示し、当館に集まる貴重な資料の数々をご覧いただきます。

企画展「山頭火と『層雲』の仲間たち」

会期

前期 七月二十六日(金)

～九月二十九日(日)

後期 十月四日(金)～十二月八日(日)
萩原井泉水が主宰した自由律俳誌『層雲』には全国から多くの同人が集まりました。種田山頭火も『層雲』同人として活躍し、『層雲』を通じて同人たちとの交流を広げました。この展示では、山頭火が交流をもつた全国の『層雲』の仲間たちをご紹介します。

◆これまでのイベント◆

10月	7日	第2回山頭火ふるさとまつり あつまれちびっ子！ハロウィン句碑巡り	1月	14日	山頭火カルタで書き初め大会
	7日	令和5年度書道コンクール表彰式		17日	山頭火を学ぶ会
	8日	第2回山頭火ふるさとまつり くるみボタン作り 句碑拓本ワークショップ		24日	自由律句を学ぶ会
	18日	山頭火を学ぶ会		27日	自由律句で遊ぼう
	25日	自由律句を学ぶ会	2月	11日	第6回自由律俳句大会表彰式
11月	3日	山頭火句碑巡り&自然観察 ～まちなかの「こんなところに！」再発見～ (共催:防府市青少年科学館ソラール)		11日	立市ひなさんぽ(～3月3日) (主催:うめてらすネットワーク)
	8日	自由律句を学ぶ会		14日	自由律句を学ぶ会
	15日	山頭火を学ぶ会		17日	消しゴムはんこ作り
	19日	出張もの作り体験 オリジナルトートバッグ作り (すごいぞ!防府 秋の大イベント)	18日	うめまつりスタンプラリー(～3月3日) (共催:うめてらす)	
25日	コリントゲームで遊ぼう	3月	21日	山頭火を学ぶ会	
12月	2日		第5回フォトコンテスト表彰式	24日	自由律句で遊ぼう
	6日		山頭火を学ぶ会	13日	自由律句を学ぶ会
	13日	自由律句を学ぶ会	23日	山頭火を学ぶ会	
	23日	自由律句で遊ぼう	27日	自由律句で遊ぼう	

◆これからのイベント (予定)◆

4月	1日	第6回フォトコンテスト作品募集(～10月31日)	6月	1日	雨の日企画(～7月21日)
	29日	うめてらす誕生祭コラボプレゼント		12日	自由律句を学ぶ会
5月	1日	第7回自由律句俳句大会作品募集(～10月31日)		19日	山頭火を学ぶ会
	4日	親子でワークショップ ～さらさらサンドアート体験～		22日	自由律句で遊ぼう

山頭火ふるさと館報

第12号

令和6年3月31日発行

編集・発行

一般社団法人

防府観光コンベンション協会

山頭火ふるさと館

747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)
無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

アクセス

防府駅てんじんぐちから約一・五km
まちなかの駅「うめてらす」から約一〇〇m
山陽自動車道防府東・西ICより約七分

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

観覧料

無料

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)
十二月二十六日～十二月三十一日まで

午後五時三十分まで

開館時間

午前十時～午後六時

(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は)

山頭火ふるさと館のご案内